

障がい者が生活しやすい社会

神奈川県 横浜市立早渕中学校 3年

神谷 綾音 (かべや あやね)

みんなの口をジッと見つめる。しばらくすると、みんなの肩が微妙に上がり、口が開く。

「今だっ！！」

私は口を開ける。でも、自分の喉は動かない。それに対して口はみんなの口の形と同じように動いていく。隣の子がこちらをチラチラ見てくる。「あー、まただ。」悔しさの粒が目の奥にたまる。そして、私は心の奥底から叫ぶ。誰かに。「みんなと同じように歌いたい！音楽を嫌いになんかなりたくない！」

音楽の授業。それは、私が苦手な科目だ。なぜなら、私は生まれつき聴覚障がいを持っているからだ。聴覚障がいの中でも私は、重度難聴だ。いつも人工内耳と補聴器を耳につけている。しかし、それをつけたからといって、みんなと同じように聞こえるようになるわけでもなく、リズムや音程が分かるようになるわけでもない。だから、私の歌声はリズムも音程も全く合っていないメチャクチャなものなのだ。みんなに迷惑をかけたくなくて、歌う時はいつも口パクになってしまう。しかし、それが隣の人にばれてしまい、チラチラと見られることがしばしばあるのが辛い。

私が困っているのは、それだけではない。本当は人と話すことが大好きで明るい性格だ。一対一で会話をする時は、聞こえを補うために口を大きく開けて話してもらえば、口の形から話の内容を想像することができる。しかし、大勢での会話はあちこちで話すため、今誰が話しているのか分からなくなり、口の形を読めず、内容を理解することがとても難しくなるのだ。よって、会話の中に入れず、「おとなしい子だ。」と思われてしまうのだ。それが、私が話しかけても薄い反応しかしない子がいる原因につながると私は考えている。本当は私も大勢の仲間達と楽しく話したり、笑い合ったりしたいのだ。でも、何を話しているのか分からないので、みんなが笑っている時はなぜ笑っているのか分からないまま、みんなに合わせて笑っている私がいる。自分だけが内容を理解出来ていないと思うと、いつも辛く悲しい気持ちになる。

二〇一六年四月一日より施行された、「障がい者差別解消法」を知っているだろうか。これは、障がいの有無によって分け隔てられることなく、互いに尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障がいを理由とする差別の解消を推進することを目的としている。この法律が施行された翌年にアンケートをとったとこ

る、「障がい者差別解消法を知っている人」は二十一・九%、「知らない人」は七十七・二%にも上ったそうだ。また、「障がいのある人に対しての差別や偏見がある」と思う人は八十三・九%もいたそうだ。

私も、普段の生活で障がい者差別解消法が社会にあまり浸透していないのでは…と感じることがある。最近でも、娯楽施設で「付き添いのない障がい者の方の入場は、安全確保に不安がある」と、聴覚障がい者が耳が聞こえないことを理由に入館を断られたという出来事があった。障がい者差別解消法の目的と真逆のことをやっているともいえる。また、聴覚障がい者は音楽のリズムや音程が分からないため、音楽の評価や基準が皆と同じでは、圧倒的に不利になってしまう。それは不公平だと感じている。努力してもどうにかなるものではないからだ。だから、障がいを持っている人には別の基準を作って欲しいと私は思う。

逆に、浸透していると思うこともある。私は以前、英語のリスニングでテロップ表示の特別措置の対応をしてもらったことがある。本当にありがたかったが、特別措置対応可能日が一日のみであるため、都合がつかない場合、英検を受けることが出来なくなってしまうのだ。だから、特別措置が受けられる日を増やして欲しいと願っている。

私は、来春には受験を控えている。受験したい高校全てが英語のリスニングで配慮してくれるだろうか。私が打診したり、受験したりすることで、そういう子がいると気付いて、対応する学校が増えることを望んでいる。

障がい者差別を解消するために、私の立場で出来ること一。多くの人に聴覚障がいのことをもっと積極的に伝えることだ。人は本能的に見慣れないものに不安を感じ、近づかないようにする。どのように接すれば良いか分からず、声を掛けられない人もいると思う。だから、自分は何に困り、どうすれば助かるのかをアピールしていこうと思う。

私の夢は、デフリンピックのバドミントン選手になることだ。「デフリンピック」とは、まだまだ認知度は低いですが、聴覚障がいを持つ人々のためのオリンピックのことだ。選出されて私が目立つことにより、障がいのある人がますます活躍しているのが当たり前の社会になって欲しい。そのために、日々努力を重ねていこうと思う。